

特色ある共同利用・共同研究拠点 中間評価結果

大学名	早稲田大学	研究分野	人文学（芸術学・芸術史・芸術一般）
拠点名	演劇映像学連携研究拠点		
学長名	田中 愛治		
拠点代表者	児玉 竜一		

1. 拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

[拠点の当初目的]

本拠点の特徴・役割

日本は古典芸能から現代演劇まで豊かな演劇文化をもつのみならず、映画、テレビ、アニメーションなど世界有数の映像文化を形成している。こうした演劇文化・映像文化の隆盛を背景に、学術面でも日本の研究水準を向上させ、国内外の研究機関や研究者ネットワークの中核となって世界を牽引する研究拠点が必要である。演劇・映像に関する共同利用・共同研究拠点としては、法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）舞台芸術研究センター「舞台芸術作品の創造・受容のための 領域横断的・実践的研究拠点」、立命館大学アート・リサーチセンター「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」がある。そのなかでも坪内逍遙以来の演劇研究の歴史と伝統に加えて COE などの実績をもつ演劇博物館「演劇映像学連携研究拠点」はいち早く共同利用・共同研究拠点を形成し、演劇映像学の総合的な研究拠点として豊富な実績をもって他の拠点を牽引してきた。また、本拠点では母体が博物館であるという特徴を活かし、再認定以来、その貴重な未公開・非公開の一次資料の大胆な研究利用を推進することで、演劇研究・映像研究の活性化と充実を図ってきた。次期認定期間でも共同研究事業の更なる展開によって国際的なハブとしての役割を一層強化し、演劇映像学の発展に貢献していきたい。

計画の概要

本拠点が再認定以来行ってきた共同研究事業は、貴重な研究資源を積極的に研究利用に供すことにより、一次資料に基づく新たな研究成果を蓄積してきた。また本拠点は、一次資料の調査機会を提供することで個々の研究者やチームが成果を上げるのみならず、資料のデジタル画像と目録をふくむ共同研究の成果をデータベース公開に直結させる枠組みを作ることによって、更なる研究へとダイナミックに資料の利活用を進める道を拓くことができた。このような他に類例のない収蔵資料の公開・共有の方法は、今後の文化資源の学術的活用の一つのモデルとして注目すべきものであり、実際に本拠点では再認定期間中にも予想を超える充実した成果を上げてきた。演劇博物館にはこれまでの対象資料以外にも歴大な未公開・非公開資料があり、専門的な研究・考証により研究資源として利活用の俟たれる資料が数多く存在する。本拠点は、次期認定期間においてはこの大きな成果を更に拡充することを目指す。そのため、これまでの学術的蓄積と拠点運営の経験を活かすとともに、より多彩な資料を対象とする。貴重な一次資料の公開と大規模な共有化の推進により、演劇研究・映像研究の更なる活性化を図る。

研究課題の公募

本拠点では次期認定期間においても、国内外から演劇博物館の非公開資料を対象とした共同研究チームを募集する予定である。共同研究では今後もこれまで同様に公募研究に力点を置き、テーマ研究を 1 件、公募研究を 4 件とする予定である。共同研究の対象とする非公開資料の公募用リストには、時代・地域・分野の異なる多岐にわたる対象資料を選定する。公募可能な研究領域を押し広げることでより多くの研究者の参加を促し、研究の俟たれる分野に一次資料の公開を通じて新たな研究の機会をもたらす、演劇研究・映像研究を推進する。

研究の成果公開

共同研究チームの成果はこれまで同様、論文、学会発表、シンポジウムによって社会に還元する。また、国際的な成果発表と学术交流も積極的に推進し、研究成果は随時、拠点のウェブサイトや『News Letter』を通じて日英2か国語で海外へも積極的に情報発信を行う。今後は、共同研究チームの成果をより効果的に発信する取り組みとして書籍刊行を視野に入れ、学内の助成制度の活用など多角的な支援を検討する。

[拠点における目的の達成状況及び成果]

拠点認定後3年後の達成状況

本拠点は、演劇博物館の豊かな研究資源を活用する5種の共同研究事業を通じて、演劇・映像の隣接分野も含めた多彩な研究者による多角的かつ先進的な研究活動を推進した。まず、「公募研究」は演劇博物館が所蔵する学術的価値の高い非公開・未発表資料を対象とする共同研究事業である。対象資料群のリストを本拠点ウェブサイト上で公開し、研究課題とチームを全国から広く公募したうえで、学外の研究者を中心に構成された運営委員会の選考により応募課題を採択した。対象資料が膨大であるため、各チームは原則として2年間の活動を行うこととしている。「テーマ研究」は本拠点が提案した資料とテーマに関する共同研究事業で、研究者の参加を広く呼びかけてチームを編成し実施した。今期から新たに採択を開始した「奨励研究」では演劇博物館所属の若手研究者が中心となり、将来の共同研究の基礎となる資料調査を行った。また、新型コロナウイルスの感染とそれによる影響の拡大が続いた令和2、3年度には「特別テーマ研究」という課題区分を設け、国内の他のどの研究機関よりもいち早くコロナ禍における演劇文化の状況の調査・記録に着手した。以上4種の事業に関して、令和2年度は計15件、令和3年度と4年度はそれぞれ14件と、いずれの年度も当初の予定5件のほぼ3倍の数の研究課題を積極的に採択し、想定よりも充実した成果を挙げた。そして今期は5つ目の共同研究事業として、本拠点主導により国内外の研究機関や民間企業と連携して行う「主催事業」にも注力した。この主催事業はコロナ禍を経た舞台芸術のあり方の検討、デジタル資源と技術の活用可能性の開拓、海外の研究機関との緊密な連携の3つを柱としたものである。

本拠点の活動の幅は広く、その成果公開も様々な方法で行われているが、具体的には、令和2～4年度の3年間で学術論文126本、口頭発表122件、シンポジウム7件、公開研究会5件等により研究成果は精力的に発表された。さらに本拠点では演劇博物館を母体を持つという特徴を活かして展示というかたちでも成果発信を行っており、本拠点の共同研究事業は3年間で7つもの展示企画に結実した。これらの展示により、学術研究の成果を学界のみならず一般にも還元している。なお、各研究課題・事業の成果の概要は本拠点の編集・発行による年次刊行物『News Letter』に日英2言語で掲載されており、この『News Letter』を頒布するほか、同じく日英2言語の本拠点ウェブサイトでも公開することで国内外に広く発信した。

関連研究者コミュニティや研究分野への影響・貢献

本拠点の共同研究事業の対象となるのは、演劇博物館の未発表資料を中心とする新資料であり、演劇・映像研究の中でも従事者の層が薄く比較的未発展の分野を特に活性化させることを目指しているが、上述のとおり、各研究課題が数々の学術論文や口頭発表等の成果をあげ関連研究分野に貢献している。

また、本拠点の特長として、貴重な一次資料を保全と閲覧の利便性向上のためにデジタル化し、その結果蓄積された研究資源データをデータベースにおいて積極的に開放しつつ、研究事業における利活用も積極的に行っているという点が挙げられる。共同研究の各チームには研究対象とする資料群のデジタル化と目録作成を依頼し、3年間の調査・研究を経て数千点に及ぶ未発表資料の目録が作成された。今期はすでに3つのデータベースを新たに公開しているが、他のデータベースについても公開準備を着々と進めており、演劇・映像分野のさらなる研究発展のために資料のアクセシビリティを向上させている。さらに主催事業では先に述べたとおりデジタル資源と技術の活用可能性の開拓を推進しており、オンラインで誰でも直感的にくずし字を読むことができるくずし字ビューアの拡充や、無声映画のデジタルデータを用いた当時の上映形態の「復元」上映会など、デジタル化した資料を活用した新規性に満ちた取り組みに挑戦し続けている。

[自己評価]

本拠点の第3期にあたる今期は初年度からコロナ禍の中で活動を開始するという試練に見舞われたものの、遠隔会議システムなど新たに導入したICTツールと演劇博物館が四半世紀以上にわたって蓄積してきた演劇・映像資料のデジタルデータとを組み合わせることによって、オンラインでの共同研究環境をいち早く整備した。これにより円滑な研究活動が可能となり、きわめて充実した研究成果をあげることができ

た。その結果、3年間の学術論文126本、口頭発表122件という成果発表の数が、コロナ禍にありながら、第2期の後半3年間の論文95本、発表91件を大きく上回るものとなったことは特筆に値する。

このようにコロナ禍の制約がありつつも活発な活動を続けてきた本拠点だが、この3年間の国際機関との連携は渡航制限などの影響を受けやや低調にとどまった。ただし、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校、お茶の水女子大学と連携した「くずし字ワークショップ」はオンライン開催により3年にわたって継続している。また、令和4年度には日韓・日英国際シンポジウムをそれぞれオンラインにて開催し、国内外から合わせて210名の参加者を集めた。両シンポジウムの様子は日本語版、韓国語ないし英語版、および発表者オリジナルの言語版という3パターン映像を作成しウェブ公開した。さらに、それぞれ日韓・日英2言語で内容をまとめた成果報告冊子も作成し、紙媒体とPDFでの公開を行っており、国内だけでなく国外にも積極的に成果を発信している。遠隔会議ツールを活用した国際的なシンポジウム・研究会開催は今後も続けていく予定であり、この3年間の取り組みはいずれも良いモデルケースになったと考えている。

2. 評価結果

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

本拠点は、母体が博物館である特徴を活かし、未公開・非公開の一次資料を研究資源として学内外の研究者に共有することで、蓄積された学術的成果を新たな研究活動に拡充させ、演劇研究・映像研究の更なる活性化に資することを目的として拠点活動を実施している。共同利用・共同研究拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を踏まえ、特別テーマ研究を設定しコロナ禍における演劇文化の状況調査を実施するとともに、コロナ禍においても研究成果の展示企画等の各種イベントを積極的に実施し、海外機関との連携やウェブサイトの多言語化といった拠点の国際化にも意欲的に取り組むなど、活発な共同利用・共同研究が行われていると認められる。

今後は、拠点の国際化や異分野融合研究等の取組を更に発展させつつ、活動の学術的意義をより客観的に示すことが期待される。